

# ほなひ歴史通信

第77号  
2015. 12. 1

「邑まつり」の調査事業について

大子郷土史の会では、今年度、各地区の「邑まつり」の調査を行っている。かつて「天道念仏、山ノ神講、淡島講、地藏講、庚申講、廿三夜講など、神仏を集合した各種のまつりが、庶民の間に根づいて日常生活のよりどころとなっていた。今では行われなくなってしまう『まつり』も多い。集落、坪、講などに残る小規模な祭礼の現状や進行状態、消滅してしまった祭礼についての記録などを調査し、「記録保存する」ことが目的である。

私は、次の四つの「邑まつり」の調査に参加した。

五月五日(旧三月十七日) 小生瀬の東堂山観世音まつり

小生瀬の前田地区では、馬の繁殖にご利益があるという東堂山観世音のまつりが旧暦の三月十七日に行われている。そこには、福島から分霊した祠があって、明治四十一年(一九〇八)に起筆された東堂山株金控帳が引き継がれている。今年の当番は大藤和久さんで、講中は、黒田宏さんから六戸である。祠の両側に、二本の東堂山観世音の旗をたて、祠の前で車座になって飲食をする。

七月十九日 西金伏木の天王様

天王様を祀ったところ、流行り病が治まったという。まつりの前日に鳥居のしめ縄を張り替え、境内を清掃する。当日は集会所に集まり、赤飯、煮しめなどで飲食をする。

七月三十一日(旧六月十六日) 大生瀬富の草 数珠繰り講

数珠繰り講は、今から約二三十年前、江戸時代の天明の大飢饉(一七八三年)のはやり病で、たくさんの人が亡くなったことから始められたという。今年当番の斎藤仁さんに案内していただいた。大生瀬神社で、当番の方が神殿に挨拶をし、大数珠を輪状にひろげて車座となり、時計の逆回りに七回廻す。昔は念仏を唱えながら廻したという。現在は九戸で行っている。

八月二十日 上金沢荒屋の十王講(ジュウオウエン)

十王は冥界(仏の世界)にあつて死者の罪業を裁く十人の王である。上金沢の荒屋坪の小林さんが当番で、十二戸の講の方が小林さん宅に集まる。現存の掛け軸十二仏を並べる。春のお彼岸、お盆、秋のお彼岸の三回行われている。お盆は、昔は八月十六日に行っていたが、仏様のお帰りの日なので、その日を避けて、今は八月二十日にしたという。この講は、地獄絵の描かれた掛け軸をかけ、悪いことをすると地獄に落ちることを戒めている。また、女人講、すなわち、女の人(多くは、外からお嫁に来た)のまつりで、飲食しながら、いろいろな苦勞話が出たことであろう。

掛け軸が入っている箱裏に、正徳四年(一七一四)甲午八月吉祥日と記してあり、まつりは三百年以上も続いていることになる。

その他、大子地方にはたくさんの「邑まつり」が行われてきた。私の育った昭和三十年代の袋田宿地区では、春に山車の出た桜まつりやテントウ様があり、七月には八雲神社の祭礼、天王様があった。子供神輿(みこし)が出て、家々を廻り、お菓子やお金をいただいた。九月には源為朝と赤鬼、青鬼の飾りを持って家々を廻ったことを思い出す。これらは、今では殆ど消え去っている。

こうした「邑まつり」の調査により、「地区住民が邑まつりの文化的価値とそれに伴う近隣のきずなを再認識することにより、その維持や復活のための機縁とすること」、「次世代層や子供たちに対し、邑のまつりを知ってもらうことにより、地域への愛着と誇りを涵養すること」などが期待されている。

(野内正美)

## 私の太平洋戦争記（五）

野内泰子

父は頻繁に手紙を寄越し、母もまた、子供たちの様子や田舎の暮らしを伝えていたらしい。だが、その手紙を出すのさえままならない状態となってきたのである。

十月には米軍が南海諸島に迫り、ついに那覇は壊滅的な被害を受ける。さらに十一月には、東京で初の空襲警報が発令された。戦禍の火は遂に本土へと迫って来ていた。

### 女学校入学・激化する戦争（東京大空襲・艦砲射撃・水戸空襲）

年が明けて昭和二十年。私はどこの女学校へ行くかで悩んでいた。本来は、女学校は横須賀へ帰って受験するつもりであった。しかし、父の転勤で横須賀に戻ることは不可能になった。そうかと言って戦火の下の東京へ行くこともまたできなかった。それで両親とも相談し、水戸へ行くことにした。三月初め頃だったと思うが、水戸高等女学校（略して水高女、現在の県立水戸二高）の入学試験を受け、何とか合格することが出来た。母方の叔父の計らいで勝田の知人の家に下宿させてもらうことになり、勝田から水戸までの汽車通学となった。お世話になったNさん宅にも同級生がいたので、家を二人一緒に出て、途中で何人かの友達と一緒に乗り勝田駅まで十分程歩いて汽車に乗った。

この頃には日本の敗色はさらに濃くなっていたが、私は十三歳になったばかり、毎日の新しい生活が物めずらしく、日本各地で悲惨な事態になっていることに心が及ばなかった。

三月十日には東京大空襲、下町の殆どが焼野原になった。父が住む芝公園そばの家はかるうじて戦火をまぬがれたが、いつまた次があるかも知れないということで海軍省の機能とともに大田区

の方に引越したと便りがあった。霞ヶ関というと日本の政治の中心であり、いろいろな役所の中枢部が集まっており危険だということであちこちに分散したのである。そんな中、父がわざわざ勝田の下宿先のNさん宅に挨拶に来てくれた。忙しく、いつ何があるか分からない非常時の真最中だったが、娘がお世話になるからと言って突然の訪問だった。その時、私は父の服装を見て驚いた。父は海軍であったが、文官なのでいつもは背広姿であった。しかし、戦争が始まってからは、緑色がかかった所謂国防色の服を着ることも多かったのだが、その時は詰襟の蛇腹のついた海軍士官の服だった。しかも、短剣まで下げていたのである。後で聞いたのだが、その頃の戦局はもう最終決戦を覚悟するしかない状況で、文官も武官もない一億総決戦という切羽詰まった状態であったと言う。

六月頃になると、私達の女学生生活も大分なれて来る筈であったが、日一日と激しくなる戦争の中で、否応なく私達の生活もその中に巻き込まれ、当時、教室で学習をしていたのは私達一年生のみ。二年生以上は工場へ勤労働員されていた。三、四年生は昭和十九年半ばから授業は受けていなかったそうだ。体育館にも機械が据え付けられ、朝からここで作業をしている上級生の姿が見られた。一年生は授業を受けていたといっても、空襲警報のサイレンが鳴ると一斉に外に飛び出し、先生に先導されて、学校裏の杉林に逃げ込んだ。今は、この辺りも住宅が建ち並んでいるが、その頃は那珂川を望む斜面一帯が杉林だったから、一年生全員が杉の根元にうずくまりひと言もしやべらず、ひたすら空襲解除になるのを待ったのである。やがてサイレンが鳴って空襲警報が解除されると、林から出て教室に戻った。でも、その日はもう授業にならず下校することになった。私達汽車通の生徒は水戸駅へと向かったが、汽車がいつ発車するか分からないときもあった。そんな時は、勝田まで歩いて帰ることにした。（続く）（天子郷土史の会）

## 大子町城館跡探訪七

野内 智一郎

### 八 鎌倉館跡（大子町上金沢字堂向）

大子町の西部、大子町上金沢堂向に鎌倉館跡は所在する。上金沢の国道四六一号線を西に進むと、左手に法龍寺がみえてくる。この法龍寺の南には押川が流れており、その対岸の山林一帯が鎌倉館比定地である。北から見ると川岸は断崖となっており、南から回らないと館跡へは辿りつけない。比定地を含む山林の東側の小道を進むと、右手に広い平場がある。入口は両側の尾根によって非常に狭いが、中は四、五〇mほどの広いスペースがあり、周囲は急な斜面で囲まれている。平場を出てさらに先に進むと右手に再び、狭いスペースが確認できる。西側には幅の狭い切り通し道があり、それを登ると非常に狭い二つの郭がそれぞれ単独で確認できる。

鎌倉館跡は全体から見ると四つほどの郭から成る物見を備えた館跡と考えられる。スペースを考えると最初の平場が館跡である可能性が高く、背後の山林が物見と想定するのが自然であろう。館主や時代は詳しく伝わっておらず、鎌倉館という名称を含めて現在では不明である。館跡に隣接する法龍寺（太子堂）は、浄土真宗開祖の親鸞の孫で弟子の、本願寺第二代宗主とされる如信が招かれたことで知られる。この地は「大子町指定史跡 如信上人終焉の地」とされ、如信上人の墓やお手植えとされる榎が残されている。積極的に鎌倉館跡と如信の関係を結び付けることが許されるのならば、如信の死去した一三〇〇年前後、鎌倉館跡、もしくは、それより前の館跡（前身となる館跡）の年代は鎌倉時代後期まで遡ることになる。いずれにしても決定的な情報が不足しており、遺構や文献に基づいた今後の研究が待たれる。

### 九 女倉館跡（大子町下金沢字女倉）

同じく大子町西部、大子町下金沢字女倉に女倉館跡は所在する。国道四六一号線を西に進み、右手の依上小学校のすぐ西の山の頂に女倉館跡は比定されている。山の標高は二〇〇m近くあるのか、一見、国道から見るととても険しく、館跡として使用するには適していないように感じる。墓地からのびる急な登山道を登ると、山頂へ到達する。山頂には四、五〇mほどの広いスペースがあり、郭を構成している。周囲には複数の郭があるようであったが、斜面が急で細かく確認することはできなかった。女倉館跡の北側は横浜ゴムのテストコースがあり、地形が大きく改変されている可能性が高い。最も広い郭が南奥に位置することから、北側に本来の道があった可能性がある。

女倉館跡は、自然地形は非常に堅固ながら現状からみるに、館跡を設けるには不健全な立地であり、物見もしくは、一時的な逃げ城、避難場所と考えるのが自然であろう。山頂の平場に簡単な館があったのか、この周辺に館跡があったのか、その可能性はあるものの、現状からは積極的に検討を進めるには情報がない。

これらの城館跡が存在する依上保は、依上城跡の項で前述したように、応永二十三年（一四一六）の上杉禅秀の乱に与して山入与義、依上宗義が滅亡し、その後、足利持氏によって白河結城氏朝に与えられた。その後、山入の乱を克服した佐竹義舜は永正七年（一五一一）には白河結城惣領家と庶子小峰氏との内紛に乗じて、岩城氏の援助の元、依上保を手中にしている。

女倉館跡の周辺には、他にも下金沢古館跡や鎌倉館跡、八幡館跡など、城跡だけでなく多くの館跡が存在する。これらの城館跡がいつ、誰（どのような勢力）によって造営されたのか、どのような関係にあったのか、前述した金資源や陸奥、下野への備えという点以外からも共通点や相違点を明確にしていく必要がある。

（水戸市在住）

## 金町屋台、本町屋台、泉町屋台の古写真（一）

大金 祐介

このほど、故皆吉祥三氏、野内厚志氏を介して、私の手許に古写真がもたらされた。古写真は、那須烏山市在住の岡田善朗氏が所有するもので、全部で四枚あり、金町屋台、本町屋台、泉町屋台が舞台として使用されている様子が写っている。このような古写真は、管見の限り他に例が無く、極めて貴重である。そこで、今回と次回の二回に分けて、これら四枚の古写真を紹介することにした。

**古写真の状態** 古写真は全部で四枚あり、四枚とも一枚の台紙に貼り付けられている。台紙の大きさは、縦三十五センチ、横四十二センチ。古写真は、四枚とも同じ大きさで、縦九・八センチ、横十三・九センチ。台紙には古写真の撮影者であると思われる「久慈郡大子町 遠藤写真館」の印字がある。撮影の時期や場所などを示す印字や書き込みなどはない。また、古写真に表題などは付けられていない。そこで、古写真の紹介にあたっては、便宜的に、写っている屋台に応じて四枚の古写真を、①「金町屋台」、②「金町屋台」、③「本町屋台」、④「泉町屋台」と呼ぶことにしたい。

**撮影時期** 四枚の古写真のうち、①「金町屋台」に注目すると、通りの両側に紅白の支柱が立てられ、その支柱に国旗と金町の紋である釘抜きが描かれた行灯が飾られていることが分かる。このような通りの装飾は、大正四年（一九一五）、大正天皇の御大典を記念して屋台巡行が行われた際に撮影された古写真にも見られるものである。このことから、①「金町屋台」も、四年、大正天皇の御大典を記念して屋台巡行が行われ、屋台が舞台として使用された際に撮影されたものと思われる。四枚の古写真は同じ台紙に貼られているため、四枚とも四年に撮影されたものと思われる。

①「金町屋台」 金町屋台が舞台として使用されている様子が写っている。向拝は右に、本殿は左に展開され、屋台の前に舞台が置かれている。大勢の見物人が屋台と舞台を囲んでいる。中には、建物の屋根の上から見物している者もいる。盛況ぶりが伝わってくる。撮影場所は、左奥に樋口呉服店（現・大子町地域おこし協力隊事務所）、らしき建物が写っていることから、金町通り（現在の丸三酒店前辺り）であると思われる。

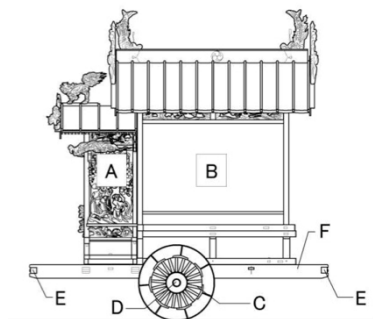
### ①「金町屋台」



#### 【参考】屋台各部の名称

A・向拝むかひ

B・本殿 又は 本屋



※ 各部の名称は、町内によって異なる場合がある。

※ 図は、『平成二十五年度 十二所神社春季例大祭調査報告書』より転載した。

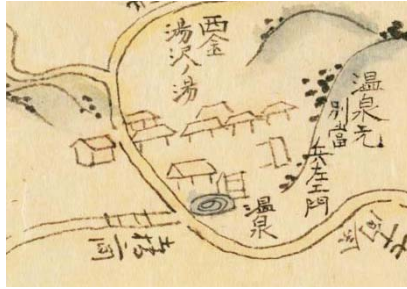
（筑波大学人文・文化学群人文学類四年）

## 保内の風景を訪ねて【一】

### 西金・湯沢温泉の歴史

水戸藩北郡の役人を五〇年以上も務めた加藤寛齋は、安政二年（一八五五）に『常陸国北郡里程間敷之記』（以下、『間敷之記』と略）を著しました。この書物には、江戸時代末の常陸国北郡の街道とその周辺の景観が、現地に伝わる伝承とともに絵入で紹介されています。寛齋の書物や地域の文化財を案内人として、本号から少しずつ明治以前の大子の風景を訪ねてみたいと思います。

西金村は、江戸時代には宿場として栄え、旅人が馬を乗り換える馬次（うまつぎ）も行われていました（『常陸御用日記』）。産物としては、こんにやくや和紙が知られており、江戸時代後期には久慈川に梁（やな）を仕掛けての鮎漁も行われています。



「湯沢温泉の図」

『常陸国北郡里程間敷之記』

（国立国会図書館蔵）より

かかれた温泉が描かれています。湯沢温泉は、江戸時代にも多くの湯治客を集めていたそうで、安永九年（一七八〇）には七九四〇人も人がこの地を訪れました。温泉の利用が始まったところは年間八〇〇〇人以上のお客を迎えていました。江戸時代後半の利用料は、入湯料八文、川番銭二文、宿泊料二四文の計三四文で、利用者には鍋・すり鉢・手桶等の道具が貸し出されていたようです。

湯坪の地割を行った際、地中から瑠璃玉が見つかったことから、湯沢温泉は「瑠璃の湯」とも呼ばれています。ちなみに、『間敷之記』によると、見つかった玉は頃藤村の東清寺に納められていましたが、住持の手によって偽物と取り換えられてしまったそうです。

す。瑠璃湯では、斗（ます）風呂を設けて入っていました。しかし、湯がぬるいため、沸かして入っていたようです。

次に、寛齋の記述をもとに、江戸時代以前の湯沢温泉の姿を見ていきます。

大永三年（一五三）二月取立てと伝わる湯沢温泉は、一七世紀も終わりの頃、地所主甚兵衛が窮迫したため、小屋修理もままならない状態に陥りました。そこで、宝永四年（一七〇七）、郡奉行川又久左衛門の力を借りて湯小屋を再興しました。この時、甚兵衛から追原畠村（後に富根村）の九兵衛という者に土地も売渡されました。その後、享保四年（一七一九）の小屋修理の際に小野瀬兵左衛門が湯別当となり、それから湯別当の入札制が取り入れられる等、次々と管理者が交替しました。

しかし、入札では管理が行き届かず、小野瀬兵左衛門に世話役が申し付けられました。兵左衛門は水戸藩直轄林の管理者である小山守の役職を与えられ、京カ沢御林に杉数千本を植え、湯小屋普請の備えとしました。湯沢温泉のぬるい湯を沸かすための槓代も兵左衛門の負担でした。水戸藩より一年あたり六〇〇駄ずつ下される槓の代金として年二四貫文を納めています。この負担金の内七貫文は京ヶ沢の木材の販売金でまかなっていたようで、文政八年（一八二五）には、西金村湯本屋兵左衛門の杉板五〇〇束が部垂村（常陸大宮市）の高和田河岸を通過していたことが記録に残っています。兵左衛門家は代々小山守として杉林を管理しつつ、材木から収益を得ていたのでしょう。幕末の頃までその管理は続き、『間敷之記』にも「温泉元別當兵左工門」と名前が出ています（上図参照）。なお、湯小屋の建替えは、近隣の村々の大工が行っていたようで、天保三年（一八三三）三月一九日の普請の際には袋田村と頃藤村の大工が一名ずつ割り当てられています。

江戸時代には、地域の有力者の支えを受け、多くの人々が湯沢温泉を訪れていたのです。

（藤井達也）

## 難渋する販路開拓と品種転換

—特産品・りんごのルーツを探る(二) —

黒田一さん、宏さん父子が種を蒔いたりんご栽培が、昭和三十年代を通して大子町内に急速に広がっていった様子は本誌第七五号で概観した。広がる半面で生じた大事な問題は、生産されたりんごをいかに売るか、つまり販路をどう開拓するかであった。

黒田宏さんは「栽培よりも販売が大変だった」と回顧している。「つくることは何とか技術的にいくようになったから今度は売る方だと。皆に私が勧めたのは、早生りんごで勝負しようということで早生を植えさせた。大産地から出荷される前に出そうと。でもだめ、早生りんごは山梨あたりにもあったし、福島ともそんなに違わな」かった、とも。青森県や長野県などの主産地との競合を避け、何とか市場に地歩を築きたいとの目論見は、残念ながら実を結ばなかった。また、市場に出荷した場合でも次のような状況であった。「東京神田にあった東一青果市場(現東京神田青果市場)へ出した。一軒ではだめなので、生瀬の人がうちに集まって、できたりんごを集めて、木の箱に詰めて一日三箱ぐらい」出荷した。この木箱にはりんごが百個入り、一箱八百円だったという。しかし経費もかかり、「経営としてはそんな量では成り立たない」のが実情であった。しかも、受け入れる市場の側でも「量と継続的な出荷がないとだめ、相手にしない。同じ品物でも高く売ってくれない。まとまった量があつて継続的に出荷しない所は優遇しなかった」と。昭和二十八、九年の頃のことである。東京市場への出荷は、早くも限界にぶつかっていた。

東京の市場で活路が開けないなか、地元での販売にも取り組みざるを得なかった。黒田宏さんと共に苦労を重ねた夫人のたか子さんは、当手を振り返って語っている。「市場に出せないものはオ

ート三輪に積んで保内郷を売って歩きました。車は誰も持ってないので、米屋さんの車を借りて、運転手さんも借りてチリンチリンと鐘を持って売って歩いて、帰って来て計算したら何も残らなかったつていうような。昭和三十一、二年の頃だったでしょうか。結婚して間もない頃。宏さんはチリンチリン鳴らすのが恥ずかしいから鳴らすのが少ない、人が集まらないんだよと私の姉が言うんです。町内をずうつと歩いたんです。ここまで買いに来てくれませんか、今みたいに。生瀬のりんごは、すっぱくてうまかねえんだねえのとみんなに言われながら」。地元で売れるのも容易ではなく、販路を求めて試行錯誤の連続だったようである。

前述のように、りんごの品種は当初から早生が中心であった。「広報だいが」第一四号(昭和三十一年十月一日発行)によると、「植付けてある品種は、祝、紅玉、旭、国光、デリシヤスなどだがこのうち本地方に適しているのは祝と旭」の早生種であり、茨城りんご生産出荷組合の組合員は「この二種に重点をおいて栽培する方針」だと紹介している。現に、昭和三十年代初め頃の品種の分布状況は、旭六〇%、祝三〇%、その他一〇%であり、早生種が圧倒的であった(大子地区農業改良相談所「調査資料」)。だが、この早生種が売れない。品種を変えようとの動きが芽生えてくる。

黒田さんによれば、昭和十九年に植えた苗木二百本のなかに中生種が「間違つて入つていて、スターキング、ゴールデンデリシヤス、これが非常においしいので中生じゃなくちゃだめだ。中生のおいしいりんごをつくらう」となり、品種の切り替えが動き出す。三十年代に入り、大子地区農業改良普及所もスターキング、ゴールデンデリシヤス、王鈴等を推奨品種とし、転換を誘導した。その結果、三十八年八月現在の品種別割合は王鈴四三%、スターキング二三%、ゴールデンデリシヤス二三%へと大きく変化した(昭和四〇年度地区農業改良普及計画書)。りんごの品種は早生から中生へと完全に転換したのである。

(齋藤典生)

## 大生瀬地区の生活・民俗今昔考（二）

―「ゆりかごから墓場まで」 出産・結婚を考える―

前回の「葬儀」（本紙第七五号所収）の対極にある寿の「出産」と「結婚」を考える。まず「出産」である。

昭和三十年代の出産はほとんどが自宅である。もちろんだが、私も自宅で生まれた。出産時に産婆様（現在の呼称は助産師）にとりあげてもらったり、出産後産婆様に診てもらうのが一般的であった。大量に湯を沸かし、男は夫以外屋外に出され、「オギヤー」の産声で出産を知り、その後家人から性別を知らされる。そして出生証明書を書くのはこの産婆様である。大生瀬地区では、産婦人科はもちろん、一般病院ですら掛かることは稀であった。

その後、昭和四十三年（一九六八）には、大子町母子健康センターが今のホテル奥久慈館の前にできた。町の医師・助産婦が常駐し、十六年間に亘り、乳幼児と妊婦に対する保健指導等の活動を行った。しかし、昭和五十九年（一九八四）秋、病医院等を利用する人が増えたため、閉館を余儀なくされた。現在はほとんどが病院での出産である。

私の姉妹は皆自宅出産だった。私の第一子は、昭和五十六年に母子健康センターで生まれ、昭和五十九年の第二子から病院出産である。このことからその変遷がうかがえ、私の場合はまさに過渡期であった。現在は、結婚相手等や住所にもよるが、水戸市位までの病院出産が多くみられる。長女が今年八月、住まいは水戸市だが、第一子をひたしなか市で出産した。このような状況である。

次に「結婚式と披露宴」である。これも自宅で行われる。自宅は前述の「葬儀」や「披露宴」の為に襖や帯戸を外すと大広間が出現するようにっており、そこで酒宴が催されたのである。この時に活躍するのが前回に紹介した漆塗りの本膳である。なお、取り祝儀

と出し祝儀では少し違う。取り祝儀の場合は組内は二人ずつ、出し祝儀は両近所様一人ずつを招待する。

現在は、取り祝儀は変わらないが、遠方等の場合、出し祝儀は両近所様を招待せず、披露宴の後で日を改めて地区内を戸別訪問し、氏名を記した品を持参することで披露に替えることもある。

もちろん結納も自宅であり、仲人夫妻が両家を往復し、結納の品々を納めるのである。今は両家がホテル等に一堂に会し、仲人も無い結納が主流と思われる。花嫁が嫁いでくると、箆箆に納めてある和服を近所の女性が見に来る習慣もあった。私の結婚時はそうだった。その後、町が推し進める新生活改善運動の一環で中央公民館での結婚式・披露宴が昭和五十年代に大変多かった。

当時、私は社会教育課で新生活改善運動も担当だった。中央公民館での結婚式は、信教の自由の観点から、仏式でも、神式でも、教会式でもなく公民館式での挙式である。挙式は担当者が進行し、中央公民館長兼務の当時小室寛之教育長が、司祭を務めた。挙式前に御両家親族紹介があり、挙式の中で婚姻届への署名押印等が行われる。会場は、中央公民館二階の第二研修室が当てられ、常時結婚式の会場にセットされ、予約申込の時等いつでも下見や打合せができる体制だった。一階の和室が新郎新婦控室、講堂が披露宴会場となった。当時は、新郎新婦の招待者の同級生等が皆でお手伝いをしており、担当者が披露宴の中で町からの結婚記念品を贈呈するのが常であった。もちろん使用料は安価に条例で定められていた。

しかし、徐々にホテルやブライダル専門店等での結婚式・披露宴がほとんどになっていく。今では遠方どうしの縁も多くなり、宿泊で行う例もみられる。また、葬儀での「花輪ポスター」も新生活改善運動の延長である。

昭和五十年代の当町の行政は、まさに「ゆりかごから墓場まで」の時代であった。

（齋藤仁司）

こんにやくの神様 (三)

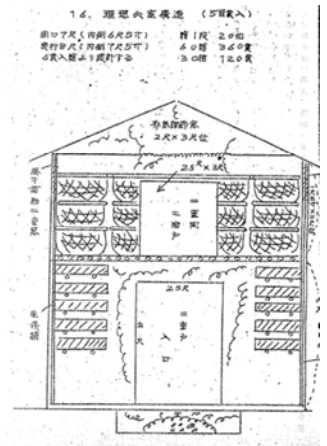
私の高祖父のコンニャク栽培研究 (火室の構造と管理)

前号ではコンニャクの「種の貯蔵と管理」、とりわけ貯蔵箱と火棚(ヒムロ)の管理について紹介したが、今回は火室(ヒムロ)貯蔵について紹介したい。

コンニャクイモは、販売できる大きさになるまで三〜五年ほどかかる。その間、冬の寒さでイモが凍るのを防ぐために、一度掘り起こして越冬させなければならぬ。その際にイモを保管した小屋を火室という。

大子町に現存する火室は、昭和三十〜四十年代に作られたものが多い。私が民俗調査で伺った中郷の佐藤重夫さんは、建築業を営んでいたが、当時火室の建設を依頼され、中郷だけで七件もの火室を建てたという。三十年以前にも火室はあったが、以前の火室は土壁で作られていた。重夫さんが建設する頃にはストラミット(圧縮ワラ材)という材料が流行していたため、それとトタンや漆喰などを使用して火室を建設したようだ。火室をその時期に新しく建てた背景には、昭和二〜三十年代にかけて、コンニャクの値段が高騰したことが関係していると思われる。

火室について勝次は、「火室貯蔵庫は構造設備に於いて理想である」と述べている。火室は、下図のように小屋の中で火を焚いて温度湿度を調節し、翌春植える前に成長を促進させる役割を担っている。勝次は、「火室に於いては窓の開閉によって温度湿度の調節と保溜は容易であるが、室内に燃焼瓦斯が充満する為に、その中に含有される有毒物等によって枯死する事があるから空気の入れ替えも必要である」と述べている。また、「寒気が烈しくなっても内部温度は(±)十度内外の保温と一〜三度差の湿度の保持が出来る様に努力」し、「保温は枯薪を埋火」し、糊殻を掛けて火



中郷佐藤律子氏宅火室  
(佐藤重雄氏建設)

理想火室構造

を長持ちさせていたようだ。勝次の報告書を見ると、火室の管理は思ったよりも難しかったようである。  
引用・参考『蒟蒻栽培の研究』(昭和二十九年五月発行)  
(家田 望)

編集後記

大子町池田出身で水戸市立博物館学芸員の藤井達也さんが、九月から大子町歴史資料調査研究員に加わりました。藤井さんは、大学院生の時代から「ふるさと歴史講座」の講師や本誌の執筆活動などに携わって

いただきました。今後とも、郷土史研究の進化に向けて若い力を発揮してもらいたいと思います。  
(家田 望)

編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生 (大子町歴史資料調査研究員)

野内 正美 (大子町歴史資料調査研究員)

井上 和司 (大子町歴史資料調査研究員)

藤井 達也 (大子町歴史資料調査研究員)

齋藤 仁司 (大子町教育委員会)

家田 望 (大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館 ☎ 0295 (72) 1148